

序 文

教養文化研究所所長 林 好 雄

本号は土方幹夫先生と前山加奈子先生の退職記念号となった。お二人の先生の赫々たる御業績については、門外漢の私には語る資格がない。『駿河台経済論集』第22巻第2号に掲載されている「主要経歴・著作目録」を参照していただくこととして、ここでは私の個人的感想を述べさせていただくことで送別の言葉としたい。

お二人の先生と私は、駿河台大学経済学部創設以来のお付き合いであるが、お二人に共通した印象としては、いかにも大学の先生らしい先生であった。これぞ大学の教師だという風格と凄味が最初からあった。ちょっとお勉強ができる坊ちゃん嬢ちゃんが教師になったというのとは、まったく違っていた。荒憲次郎、飯野利夫、小島清、地主重美といった錚々たる専門の先生方に対しても、一步も引けを取らない頼もしさがあった。今日、学内外を問わず、お二人のような先生の姿をお見かけすることが少なくなったのは、実に残念なことである。

新入生ガイダンスなどで、古武士のような風貌の土方先生が登場して、「さあ深呼吸をしましょう」と言うとき、それまでの緊張と退屈でよどんだ空気が一変した。人間は身体というものを通じて学ぶのだということを改めて思い知らされた。教室の中では粹がっていた不良少年たちも、先生の前では小さくなっていた。

前山先生については、中国の女性史に関する着実で実証主義的な研究態度とともに、いつもきちんとした身なりをされていたことが、特に印象に残っている。先生の中国語の授業が優れて実用的であったことは、数多くの学生たちが実証している。個人的なことを付け加えるならば、ある日、私の大学時代の先生の一人であった山田ジャック先生の御子息のレオさんが制作したテレビ番組に、前山先生が出演されていた。大学で話をされるのとまったく同じ落ち着いた話しぶりだった。背景にある膨大な研究の積み重ねが感じられるものだった。

経済学部の最後の教授会で、お二人の先生が挨拶に立たれたが、お二人ともこれで終わりなどとはいささかも考えていない御様子だった。研究に、社会貢献に、これまで以上に取り組もうという強い意欲が漲っていた。あとはお二人の御健康を祈るばかりである。Bon voyage!